

パンチョ・ビヤのコロンバス襲撃

1915年の終わり、ビヤの壊滅的なソノラ作戦の後、アメリカの観測筋はカランサが実権を握り北部師団は軍事的に消滅したとの見方で一致していた。その上、多くがビヤはアメリカへ亡命すると予想した。チワワ州知事イグナチオ・エンリケスはビヤが亡命するとは言わなかったが、州内をさ迷っているビヤ兵は取るに足らぬと判断し、カランサに二千人の兵を要求しただけであった。ビヤはそれまで手を付けることがなかったアメリカ資本の農場を襲い始めた。人気落ちるにつれて、ビヤは狂暴さを剥き出しにしていった。更に不評を買ったのは、鉱山業その他で操業を再開しようとしたアメリカ企業をビヤが妨害したことであった。経済回復を遅らせることでカランサ政権を弱めようとしたのと、アメリカの企業家に危害を加えることにより、アメリカ政府が軍事介入に踏み切ることを期待していた。⁸

1916年1月10日、このような背景のもとチワワ州サンタ・イサベルの町で、鉱山の町クシウイラチ行き旅客列車がジェネラル・パブロ・ロペスの指揮するビヤ軍分遣隊に襲われた。列車にはメキシコ人以外に、クシウイラチ鉱山の操業再開のためアメリカ人マネージャーと十八人の鉱山技師が乗っていた。彼等はチワワでの内戦が激しくなり避難していたのを、カランサ政府が治安回復を保証して操業再開を求めたため、戻る途中であった。治安に不安を感じたマネージャー・C. R. ワトソンはカランサ政府に軍隊の派遣を求めた。しかし、カランサのチワワ政府は、ビヤは既に無力で、その必要はないことを強調し、軍隊の派遣を拒んだ。この決定が悲劇を招いた。突然列車が止められ、様子を探りに外に出たアメリカ人三人のうち二人はいきなり射殺され、ただ一人の生存者となるトーマス・ホームスは藪の中に逃れた。客車に入ったロペスの兵士はアメリカ人を皆外へ連れ出して殺した。この殺戮のあと、メキシコへの介入を叫ぶ声が高まったが、ウイルソン大統領はメキシコの内政干渉になるとして退けた。しかし数週間後、大統領が態度をガラリと変える出来事が起る。⁹

1916年1月18日、パンチョ・ビヤは二百人の精鋭、ドラド守備隊員を集め、これから国境の町オヒナガからアメリカを攻撃することを伝えた。最後となるこの攻撃が終わったら、皆解散すること、途中で分遣隊が加わることを伝えた。オヒナガの対岸プレシディオのあたりは何もないところで、守備が手薄であること以外、ビヤが何故そこを選んだのか、理由は分からない。24と25日の夜、かなりの脱走兵が出た。カルデナス大佐が五人を連れて脱走兵を追った。28日まで待ってもカルデナスは戻ってこなかった。更に脱走兵が増えることを畏れたビヤは遠征を中止した。¹⁰

ビヤはこれに懲りず2月20日、未だ忠誠を誓う腹心の部下カンデラリオ・セルバンテスを彼の故郷ナミキパに送り、元北部師団の兵士を対象に強制徴兵を行った。志願兵しか率いたことのないビヤは初めて、ポルフィリオ・ディアス時代のような手段に頼ることに

なった。前回のように入走兵が出ることを入れて、ビヤは攻撃目標がアメリカであることを伏せた。彼は脱走すれば家族を全員木から吊るすと兵士を脅した。11

2月24日、ビヤはニューメキシコ州コロンバス攻撃に出発した。各駅に数千の志願兵が集まった北部師団全盛時代に比べると酷い違いであった。何時脱走するかもしれない、戦意の全くない徴兵を率いるのは始めてであった。約二週間、部隊はアメリカへ向かって行進した。カランサ軍から察知され、コロンバスに通報されるのを恐れ、夜間行軍した。遠征部隊が途中で出合った数人の民間人は捕らえられた。メキシコ人は二三日して、馬や所持品を返して放免された。国境に到達するまでに出合ったアメリカ人は残忍な仕打ちを受けた。ビヤはそれまでアメリカ人の財産を掠奪し、国外追放をした事は数々あったが、無慈悲に殺した事はなかった。途中で出会った三人のアメリカ人カウボーイの一人はビヤと顔見知りであった。一度友達になればビヤは決して害を加えないことを知っていた彼は、仲間と一緒に、いとも簡単に殺されてしまった。殺された一人のアメリカ人妻はコロンバスまで同行させられてから放免された。12

3月8日、ビヤの遠征隊はコロンバスから四マイルの地点に到着した。コロンバスは住民二百から三百人が丸太小屋に住む、全く魅力に欠けた村で、六百人近いアメリカ軍守備隊が駐屯していた。ビヤがコロンバスを襲撃したのは、サム・ラヴェルという男の家があったからと言われている。ビヤは武器を購入するためラヴェルに金を渡していたが、約束を果たさず、金も返さなかった事への仕返しであると。しかし、最初にオヒナガの対岸、テキサス州プログレソを攻撃しようと試みたことを考慮に入れると、この説にはあまり説得力がない。ビヤは米軍守備隊を簡単に打ち破り、機関銃や最新の小銃を易々と手に入れることが出来る程度に考えていたのではないだろうか。13

決断を下す前にビヤは丘の上からコロンバスを見下ろし、守備隊の数が斥候の報告以上に多いことを確認し、逡巡した。ビヤはセルバンテスと彼の追随者に説得され、到着日の夜攻撃する決意を固めた。ビヤの作戦は部隊を二班に分け、一斑は町の南にある軍の宿营地キャンプ・ファーロングの攻撃、第二班は町の中心にある銀行を襲い、ラヴェルを撃って彼の家を焼き払うにことにした。ビヤは少数の予備部隊と共にメキシコ側に残り、3月9日朝4時45分、国境から三マイル離れたコロンバスへ突入を開始した。奇襲攻撃は成功した。14

コロンバスには第十三騎兵連隊が駐屯していた。守備隊長は二日前、ビヤが国境に接近しコロンバスを攻撃する可能性があることを警告されていたにもかかわらず、無視した。カランサ軍チワワ州最高指揮官ジェネラル・ガブリエル・ガビラがジェネラル・パーシングに送った警告は守備隊長ハーバート・スローカム少佐に伝えられていた。以前にも似たような話があり、何事も起こらなかったのも、司令官の警告を無視した。しかし今回はアメリカの牧場で働くアントニオというメキシコ人から、武装したメキシコ人の大きな集団がコーベットというカウボーイ仲間の一人を逮捕した、との話を聞いて少し驚いたスロー

カムはアントニオに二十ドル渡して偵察をさせた。部下をメキシコに潜入させる事は禁じられていたからである。アントニオが実際に探したかどうかは疑わしい。アントニオは見つけることが出来ず、コロンバスから離れていく二つの縦隊と思しき足跡があったことを報告した。スローカムは念のため越境地点と予想される二箇所に分遣隊二百人を配置し、残り三百五十人をコロンバスに置いた。しかし警戒態勢をとったわけではなく、部下の将校はいつものように町の北にある自宅に帰っていた。15

1916年3月9日4時45分、守備兵は眠っていた。当直将校は二人しかいなかった。ビヤ兵は兵舎に向かって一斉射撃を加え、基地は大混乱に陥ったが、将校は素早く体勢を立て直した。ビヤの過ちは、守備兵の数を少なく見込んで部隊の半数しか基地攻撃に向けなかったことと、最初に襲ったのが厩舎で、宿舎でなかったことであった。ビヤ兵が馬を殺している間に立て直した守備兵が機関銃で応戦した。アメリカ軍の火力に圧倒されたビヤ兵は多くの犠牲者を出し、町の中央部へ移動した。第二班が突入した町では市民がパニック状態になっていた。「ビバ・ビヤ、ビバ・メヒコ」と叫んで民家を狙い、飛び出した市民に向かって発砲した。

彼等はサム・ラヴェルのホテルに押し入り、四人の客を殺した。ラヴェルはエルパソへ歯の治療に行っており不在であった。アメリカ兵は既に反撃に出ていた。未だ暗く、逃げ惑う市民とメキシコ兵の区別は付かなかった。暫くするとビヤ兵がホテルに火を放ち、辺りが炎に照らし出されると、ビヤ兵は次々と倒れた。やがて鳴った喇叭の合図でビヤ軍は撤退した。アメリカ軍は容赦なく後を追ってメキシコへ五マイルも攻め込み、ビヤ軍後衛部隊と激しい撃ち合いをしてコロンバスへ引き上げた。16

アメリカ人の犠牲者は十七人、殆どが市民であった。命を落としたビヤ兵は百人以上、しかも銀行の金やアメリカ軍の武器など何一つ得る事は出来なかった。しかし、ビヤは心理的には大成功を収めた。国境地帯のアメリカ人を恐怖に落とし入れ、少なくとも北東部においてカランサ政府は無力であることを証明した。怒り心頭に達したアメリカ兵は捕虜を虐待し、町に住むメキシコ人七人ほどを共謀者として逮捕し、法廷で裁いて半数を木に吊るした。17

たまたま、コロンバスのホテルに泊まっていたAP通信社員の電報で、ウイルソン大統領はビヤが引き揚げてから僅か三時間後に事件を知ったが、直ぐには動かなかった。ジェネラル・フンストンとファーガソンは直ちに反応し、国境へ援軍を送ると共にパニックになった市民のコントロールにあたった。コロンバスではビヤが再び襲ってくるとの噂が広まり、スローカム大佐は女子供を基地の中に受け入れた。18

翌日3月10日、ワシントンでは閣僚会議が開かれ、その午後大統領令が発せられた。ビヤを逮捕し、彼の一団が再び攻撃するのを防ぐため、メキシコの主権を犯さないよう細心の注意を払って、メキシコ国内へ軍隊を送る、と言う内容であった。ウイルソンはヤンキーの侵略と受け止めるカランサの反応が気がかりであったが、国民が交戦を要求してい

た。カランサは個人的にはアメリカの援助を求めているが、国民からアメリカに屈したと見られることは避けなくてはならなかった。カランサはこれまでもアメリカに主権が侵されることに関しては常に敏感であった。19

事件の当日午後3時、チワワのジェネラル・ルイス・グティエレスは、アメリカの領事に、盗賊捕獲の命令が出ていることを告げ、更に三時間後には追討部隊二百五十人と、さらにオヒナガに向けて三百五十人が既に出発したことを報告した。アメリカ、特に国境沿いの市民はそのような対応には満足せず、メキシコからの謝罪とビヤへの報復を要求した。

ランシング国務長官はメキシコ市の特別捜査官ジョン・ベルトに厳しい内容の書簡を送り、自ら直接カランサに手渡すことを命じた。カランサからの回答はその日のうちに届けられた。1880年代には両国の間に似たような問題が発生していた。アメリカのインディアン保留地からアパッチがメキシコを頻繁に襲っていた。この時両国はお互いに武装した軍隊を自由に、国境を超えて盗賊を追跡し懲らしめることに合意していた。カランサの回答にはウイルソンの意向を保証するだけでなく、この故事に則った新しい取り決めをする重要な提案も含まれていた。

ウイルソンとランシングが安堵したのも束の間、次の日カランサは考えを改め、もしアメリカ政府が軍隊をメキシコの領土に送り込むなら、メキシコ政府はその行為をメキシコへの侵略と見做す、と通告した。ウイルソンはカランサの警告を無視した。その理由は二つあった。一つはカランサにはチワワを警護し、ビヤを追跡する力がないと判断したこと、もう一つは、アメリカ国民が騒然となっていて、何か手を打つ必要があった。ウイルソンが再選をかけた選挙は数ヵ月後に迫っていた。このまま放置すると議会がメキシコに対する全面戦争を強制することになりかねなかった。ドイツへの宣戦布告が重くのしかかり、それだけは避けねばならなかった。20

8. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P550
9. Ibid. P557
10. Ibid. P560
11. Ibid. P561
12. Ibid. P562
13. Ibid. P563
14. Ibid. P564
15. Ibid. P565
16. Ibid. P566
17. John S. Eisenhower, "Intervention! The United States and the Mexican Revolution, W. W. Norton & Co., Inc., 1913-1917, P227
18. Ibid. P228
19. Ibid. P230
20. Ibid. P232